

サービスラーニングを体験すること ―学生の学びを通して―

原田正樹

2年目のサービスラーニングの学習が終わった。昨年は初めてのことで、学生ともども手探りの状態だった。今ふりかえると活動先の方から質問されても、「とにかくよろしく願います」と答えるしかなかったのが正直なところだ。この学習活動を取り入れようとした「ねらい」の説明に終始していた。今年は学生たちよりも、少しだけ見通しができたおかげで、サービスラーニングの学びをどう深めていけばよいか考えながら一年間を過ごすことができた。

このプログラムは、とにかく書いて、考えて、発表する。その上で、グループで話し合っ、まとめて、プレゼンする。この繰り返しである。その間にいくつもの「体験」が折り重なる。学生たちが「力」をつけるために、この作業がとても必要である。ふだんの授業でもコメントを書くこと、考えることはさせているが、この発表を重ねることが出来ていない。発表を重ねるといのは、自分の意見、他人の意見を交換するなかで、話し合いを通して、グループの意見としてプレゼンができるように集約していく協議の過程である。

同じ体験をしてきた学生同士が、ふりかえりをして意見を交換することで、違った気づきをしてきたことに気づく。さらにそれを活動先の人たちに対してどうフィードバックしていくか、報告会に来てくださるであろう活動先の人たちの顔を思い浮かべて緊張しながらプレゼンの準備をしていく。このプレゼンの緊張感とリアリティのある気づき、そしてグループ学習を大切にすることが、この学習プログラムのひとつの特徴ではないだろうかと感じている。

ただしこうした学習の過程だけであれば、素材は何でもよさそうな気がするが、一年間学習を継続させるためのモチベーションが重要である。学生たちが主体的に学んでいくためには、そのことを達成しよう、乗り越えようとする意欲がないと長続きしない。このことがうまくいかないそれはただ課題を与えられてやらされるだけの作業になってしまう。

ここにサービスラーニングとしての特色がある。つまり活動しているNPOの「現場」を通して、現実を知る、課題を知る、想いを知ることである。学生のレポートに書かれているそれぞれの体験やそれを通しての気づきは、彼らの学びの大きなモチベーションになっている。彼ら彼女たちが生き生きと語っている内容は、大学の教室内だけでは伝えられない「地域の生の姿」である。たかが6日間、されど6日間。この生き生きとした体験があるからこそ、一年間という長期にわたって彼らが学び続ける原動力になっていることがわかる。

しかしながら、このNPOでの活動が受け身で終わってしまうと、なかなか後期のふりかえりにつながらない。学生たちが少しでも主体的に関わることで、この学習の成果を左右するようである。よって活動前の企画が重要である。ただし学生たちの企画通りに出来たか否かではない。活動が終わったあと、直後のふりかえりでは、自分たちの企画が成功したか、失敗したかの反省ばかりである。しかしふりかえりを重ねていくことで、その企画から何を学んだかを学生自ら考えるようになる。成功か失敗かではなく、自分たちの企画に関わってくれたスタッフやお年寄り、子どもたちなど沢山の人のことを思い出しながら、何が必要だったのか、何を大切にしなければいけなかったのかを考えていく。

「地域貢献」という言葉は、たしかに実態として飛躍していると思う。学生たちの実力からすれば何かを貢献するという以前に、身につけなければならない課題も多い。ただ「自ら貢献できることは何か考えてみよう」という問いかけは、ある学生に言わせるととても「新鮮」な投げかけだったと言う。自分たちにもできること。そのことをNPOの現場で感じとってきた学生たちの言葉に、感動を覚える。NPOの有する教育力に、ただただ感謝している。本当にありがとうございました。